

B. ラッセルの宗教思想

野 村 博

1. はじめに

「私が宗教的な正統派的信奉に対して以前ほど反対しなくなってきた、という趣意の風説が近年立てられている。この風説は、まったく根も葉もないものである。私は世界の大宗教——仏教・ヒンズー教・キリスト教・イスラム教および共産主義——はすべて真実でないとともに有害であると考えている。これらの大宗教は意見が合わないから、多くてもそのうちの一つしか真実でありえないことは、論理の問題として明白である。ごく少数の例外はあるけれども、ある人が信ずる宗教は、その人が住んでいる社会の宗教であって、このことは、その人に当の宗教を信じさせるようになったものが環境の影響であることを明らかにしているのである。……ある宗教の真実性の問題と有用性の問題とは、まったく別物である。私は諸宗教は真実でないことを堅く確信していると同時に、諸宗教は有害であることを堅く確信している。」⁽¹⁾

これは、1957年 Paul Edwards が Bertrand Russell の主として宗教に関するエッセイを編集して公刊した “Why I am not a Christian” に Russell 自身が寄せた序文の一節である。Ronald Jager が著 “The Development of Bertrand Russell’s Philosophy” (1972) のなかで指摘しているように、⁽²⁾ このような Russell 自身の序文によって闘争的な論調がいちだんと強められている “Why I am not a Christian” は、およそすべての宗教——厳密には宗教的組織——が虚偽で有害であって、道徳的進歩の障害にして

B. ラッセルの宗教思想

人類の幸福に不利益である、という Russell の信念を述べた宗教に関するエッセイである。

そして Russell の宗教観は、ごく一般的には、このいわば扇動的なエッセイ集を視座にして広く知られているのであって、すなわち Russell は、キリスト教徒ではなく、不可知論者であり、さらには結局は無神論者であると考えられている。事実 Russell 自身、ある読者から無神論者か不可知論者かと尋ねられた手紙に対して、「……哲学的な厳密さにおいては私は自分を不可知論者と呼ぶべきであるが、しかし理論は別として実際上は無神論者であると考えている。」⁽³⁾と返信しているし、Russell の哲学を批判的に説明しようとした Ronald Jager は、「Russell は成人してからの全生涯を不可知論者として過ごした。彼の最後の40年間は、不可知論と無神論とを区別するのがやや学術的になるほど熱烈な不可知論者であった。」⁽⁴⁾と述べている。

しかし、はたして Russell は、キリスト教徒ではなく不可知論者であり無神論者であるとしても、どこまで、またどんな意味において、そうなのか。いやしくもまったく反ないし非宗教的なのであろうか。私はこの小論において、Russell の宗教に関する諸論文をとりあえず年代記的に考察して、彼の宗教思想を明らかにしていきたいと思う。

2. 『自由人の崇拜』

Russell のアンソロジーとも言うべき “The Basic Writings of Bertrand Russell” (1961) を編集した Robert E. Egner and Lester E. Lenonnが、“Part II The Nobel Prize Winning Man of Letters” のタイトル・ページに、「Russell は自分の最もポピュラーなエッセイである “A Free Man's Worship” のことをもはやよく評価しないと主張しているけれど、このエッセ

B. ラッセルの宗教思想

イを含めなければ Russell のどのようなアンソロジーも完全なものにはならないだろうし、また20世紀の最上の散文を集めたアンソロジーであるならば、これを除外して正当だと理由づけるのに非常に困ることであろう。⁽⁵⁾と評釈を記しているが、まことにこの“A Free Man’s Worship”は、宇宙における人間の位置についての Russell の考え方、つまり宇宙における人間の塵芥的存在性と洞察力・判断力・思考力における人間の優位性についての彼の見解を文学的・散文的に表現した美文調のエッセイである。

“A Free Man’s Worship”（『自由人の崇拜』）は、1903年“The Independent Review”に寄稿した Russell 31歳のエッセイであるが、このなかで彼は、自然（世界）は無目的で無意味でさえあるが、人間は、全能ではあっても盲目である自然が空間の深淵をただいつまでもかけめぐっているうちに最後に産み落とした子供であり、「人間の起源・成長・希望・恐怖・愛情・信念は、さまざまな原子の偶然的な配列の帰結にほかならない。」⁽⁶⁾と述べている。「いかなる熱情も、いかなる英雄的行為も、いかなる思想や感情のはげしさも、個人の生命を墓場の向こうまで持続させることはできない。いく時代ものあらゆる労働も、あらゆる献身も靈感も、あらゆる人間の天才という真昼の輝きも、すべては太陽系の広大な死のなかで絶滅するように運命づけられている。人間の達成した業績の殿堂は、すべて絶滅した宇宙の廃虚の下に不可避免的に埋められなければならないのである。」⁽⁷⁾

しかし Russell は、このような真理の断頭台のなかでのみ、そして頑として絶望に屈しない確固たる基礎のうえにのみ、魂の住居をこれからは安全に築くことができ、我々の理想は故郷を見つけ出さなければならないと論じる。自然の子供である人間は、自然の力に服従してはいるが、洞察力という天賦の才が与えられ、善・悪の知識をもち、無思考の母なる自然のあらゆる所業を判断する能力を有している。「人間は、親たる自然の統御の証拠にして刻印である

死にもかかわらず、その短命の歲月の間に検討し批判し認識し想像のなかで創造する自由がある。人間の熟知している世界において、この自由はひとり人間にのみ属している。そして、ここにこそ人間の外的生命を支配する抵抗できない諸力に対する優位性が存在するのである。⁽⁸⁾」

我々人間は、行動においても欲望においても、外部的諸力の専制に永久に屈従しなければならないが、しかし思考力において、抱負において、我々は自由なのである。我々が運命という外部的支配を諦観することを学び、非人間的の世界は我々の崇拜に価いしないことを認めることを学んだときに、創造的理想主義の洞察力がみずからの思想が初めてつくった美の反映を見つけ出すことができる。「かくて人間の精神は、思慮なき自然の諸力に対し微妙な支配力を主張する。」⁽⁹⁾ 人生は、外部的に眺めた場合、自然の諸力に比べれば極めて小さいものである。奴隷は、時間と運命と死とを崇拜するように運命づけられているが、しかし、時間や運命や死がどれほど偉大であるにしても、これらについて多大に思考し、これらの情熱なき壮麗さを感じることは、はるかに偉大なことである。そして、このような思考こそ、我々を自由な人間にさせるものにほかならない。

「我々はもはや不可避的なもののまゝに東洋的に隷従して頭をたれ下げることではなく、その不可避的なものを吸いこみ、それを我々自身の一部とする。私的な幸福のための闘争を放棄し、束の間の欲望のあらゆる執着を駆逐し、永遠なものを求めて情熱に身を焼くこと、——これこそ解放であり、自由人の崇拜である。」⁽¹⁰⁾

Alan Wood が “Bertrand Russell—the Passionate Sceptic” (1957) のなかで、「Russell の “A Free Man’s Worship” について私ができることといえば、読者がこのエッセイの再録されている “Mysticism and Logic” を買い求めて、それを読みなさいということだけである。読めば読者は、なか

んずく Russell の教訓のなかに新約聖書の聖句の一節のように読めるものがある⁽¹¹⁾ことに気づかれることであろう。」と述べているが、神秘的な自然に対する素朴な畏怖の念に基づく宇宙観と、冷酷非情な自然の諸力のもとにある時間・運命・死を創造的に超克していくべき人間観とが、微妙に織りなされて、そこに有限可死的な人間が魂の住居としての理想の故郷を見つけだすべきである、と「自由人の崇拜」を Russell は力強く説くのである。

3. 『宗教の本質』

“A Free Man's Worship” について Russell が宗教に関して書いた論文に、1912年 The Hibbert Journal に寄稿した “The Essence of Religion” がある。これは、Ronald Jager が、「宗教問題に関して Russell が書いたもののなかで価値のあるものは、彼が人々から最もよく知られるようになった⁽¹²⁾ものでもなく、また彼が人々に記憶されたかったと多分望んだものでもない。」と述べて、論争的な論文がほとんど “Why I am not a Christian” のなかに集められているのにかかわらず、「特に宗教的な主題に関して Russell が書いた最善のエッセイである “The Essence of Religion” がこのなかに省かれているのは不可解である、と難詰して、「人々から大いに忘れられているが非常に宗教的で感動的なエッセイ⁽¹³⁾」であると激賞しているものである。

この “The Essence of Religion” (『宗教の本質』) において Russell は、伝統的な宗教的信仰の衰退——教会の支持者たちによっていたく嘆かれ、古い信条を単なる迷信だと考える人々によって喜んで迎えられている伝統的な宗教的信仰の衰退は、否定できない事実であるけれど、教条(ドグマ)が拒否されても人生における宗教の位置に関する問題は決して確定されてはいない、と論じはじめる。もともと教条に価値があるとされてきたのは、何も教条自体のた

めではなく、教条が世界に対するある一定の態度、我々の思考の習慣的な規制、欲望や日々の配慮の専制から逃走して自我の有限性から解放された統一体における人生 (a life in the whole) を容易にすると信じられたがためにほかならない。このような統一体における人生は、教条なしでも可能であって、前時代の信仰がもはや信じられない人々の無関心さのために滅亡すべきものではないのである。

しかし、宗教によって鼓舞された行為には、ある無限の性質がある。この無限の性質こそ、貪欲や些細な考えの牢獄から人々を自由にする無欲の束縛がない統一体における人生、つまり宗教をなすものである。この牢獄からの解放は、宗教によって与えられるが、しかしそれはただ束縛する教条のない宗教によってのみ可能である。「人間の魂は、神と獣との不思議な混合物、つまり一方では特殊の有限で自我中心的な、他方では普遍の無限で公平無私な、二つの性質の戦場である。」⁽¹⁴⁾ 無限の性質は世界における結合の原理であり、有限の性質は分割の原理である。無限の性質を有するものが、我々の日常生活の断片的な知識よりも深い洞察を与え、この洞察によって支配された人生は、闘争から自由な人生、全体と調和した人生、有限な自我の本能的欲望によって築かれた牢獄の壁の外にある人生であろう。

このような知恵を突然に経験させるものこそ、Russell によれば、宗教において本質的なものの源泉である。そして、「有限な自我の人生から統一体における無限な人生への移行には、絶対的な自我放棄の瞬間が必要である。」⁽¹⁵⁾ 無限の人生が生まれる自我放棄は、服従を義務とする全知の神に対する信仰によっていっそう容易にすることができる人々もいるだろう。しかし、自我放棄は、その性質上、何か特定の信仰に依存してはいない。過去の宗教は大なり小なり教条、すなわち宇宙の本性と目的に関する何らかの理論に基づいてきたが、伝統的な信仰の衰退は、強烈に宗教的な性質をもっている多くの人々にとって教

B. ラッセルの宗教思想

条に依存する宗教を当てにならない、そしてさらには不可能なものであるとさえ、考えさせてきたのである。したがって、日増しに知的な正直さをもって賛成することが困難になってくる教条に依存することなく宗教を保つことが、まず第一に最も重要な事柄となってきたのである。

キリスト教には、Russell によれば、できれば保存するのが望ましい三つの要素がある。すなわち、崇拜と黙従と愛である。

未熟な宗教において崇拜は、恐怖だけで喚起され有力なもののすべてに対して与えられるが、高度な形態の崇拜には、喜悦を伴う黙想、尊敬の念、神秘感の三つが必要不可欠である。およそ崇拜は、理想的なものを選択的に崇拜する理神論的信念に基づくものと、現実的なものを公平無私に崇拜する汎神論的信念に基づくものと、二つの種類があるが、宗教はこの異なった二種類の結合から生じるものである。そして宗教的行為とは、より多くの善を存在させ、存在するものをより多く善にすることによって、これら二種類の崇拜の対象間の間隙に橋をかけようとする絶えざる努力のことである、とRussell は論じる。

黙従については、不可避的なものは善でなければならないという判断をすることなしに、不可避的なものに対して黙従することを学ばねばならない、とRussell は言う。黙従には、普遍的な愛と公平無私な意志の成長における本質的な要素として、私的な悲嘆に対する黙従のほか、この世の根本的な悪に対する黙従がある。これは、私的悲嘆に対する黙従と同様に、黙想・普遍的愛・公平無私の崇拜により促進されるが、これらのものが可能になるまでにすでにある程度存在しなければならないのである。しかし、いずれにしても、「黙従は信仰の原因にして同時に結果である。」⁽¹⁶⁾

愛には二種類ある。すなわち、対立的な分離をもたらす選択的地上的愛と、無差別的無制限の一体性を生み出す公平無私の天国的愛がある。対立ではなく一体性を真実であると感じさせるものこそ、神的な愛にほかならない。神的愛

は、魂を牢獄から解放し、世界との結合を妨げる自我の壁を打ちこわすものであり、この愛が強いところでは義務は容易となり、いっさいの奉仕も喜悅の念で満たされるのである。

崇拜・黙従・愛という宗教の三要素は、相互に密接に関連し合っているのであって、一が他の生じるのを助け、三が一になって、いずれが先後とも言えない統一をなしている。「すべてこの三要素は、人生を支配し行動・思想・感情に無限性を与えることができる形において、教条なしに存在しうるのである。三要素の結合である無限なものにおける生命は、教条的信念が存在していなくても、宗教に本質的なすべてのものを含んでいる。」⁽¹⁷⁾そして、「宗教の本質は、我々の生命の有限な部分を無限な部分に従属させることにあるのである。」⁽¹⁸⁾

人間における二つの性質のうち特殊なものすなわち動物的存在は、本能に生き、肉体と子孫の幸福を追求するが、普遍的なものすなわち神的存在は、宇宙との結合を求め、この追求を妨げるいっさいのものから解放されることを欲する。動物的存在は、それ自体においては善でもなければ悪でもない。ただ神的存在が世界との結合を探求する場合に、援助するか妨害するかによって善となるか悪となるかにすぎない。魂は世界との結合において自由を見いだすのである。Russellによれば、この結合に三種類ある。つまり、思想上の結合、感情上の結合、意志上の結合である。思想上の結合は知識であり、感情上の結合は愛であり、意志上の結合は奉仕である。したがって、結合に対立する分離にも、思想上の分離としての誤謬、感情上の分離としての憎悪、意志上の分離としての闘争が、それぞれ対応的に存在する。そして、「分離を促進するものは、人間の動物的な部分である執拗な本能であり、結合を促進するものは、知識と愛とその結果として生じる奉仕との連合であって、この連合こそ、人間の至高の善である知恵である。」⁽¹⁹⁾

以上のように『宗教の本質』を論じてきた Russell は、次のように述べて

この論文を結ぶのである。「我々の理想はすでにこの世において実現されるべきである、という執拗な要求は、知恵がそこから解放されなければならない最後の牢獄である。要求はすべて牢獄であり、知恵は何ものをも求めないときにはじめて自由なのである。」⁽²⁰⁾

4. 『宗教と教会』

宗教に関して特に書かれた Russell の第三の論文は、1916年に出版された“Principles of Social Reconstruction”に収められている“Religion and the Churches”（『宗教と教会』執筆は1915年）である。

この論文で Russell は、中世の終わり以来世界が経験してきたほとんどすべての変革は、新しい知識の発見と普及によるが、ルネッサンス・宗教改革・産業革命さらに教条的宗教の衰退の原因も、そこにあって、教条的宗教の衰退は、よかれあしかれ近代世界における最も重要な事実の一つである、と主張する。Russell によると、宗教には個人的な面と社会的な面があるが、プロテスタント派にとっては、宗教は第一義的に個人的なものであり、カトリック派にとっては社会的なものである。この二つの要素が密接に混じり合うときにはじめて宗教は、社会を形成する強力な力となる。だから宗教改革以来、この二つの要素の分裂が宗教の力を弱めたのである。

ところで、聖職者の職業は、Russell によれば、聖職者は他の人々よりも有徳的であるという社会通念と、もう一つは寄付金という二つの原因で、厄介を蒙っている。それに、教会の信条がまちがったものであるということが問題なのではなく、信条が単に存在するという事実が誤っているのであって、いかなる信条にしても、これを受け容れることに収入・地位・権力が依存しているようになれば、知的誠実さは危機に陥るのである。このように考えてみると、

宗教にまつわる弊害は、職業的な僧侶階層の存在と切りはなすことができない。だから Russell によれば、急速な変化が起っている世界で、もし宗教が有害なものとなるべきでないならば、宗教はクエーカー派のフレンド協会のように、週日は他の職業をもつ人々として、宗教的な仕事にはいささかたりとも報酬を受けることもなく、熱意からやる人々によって営まれなければならない、と説くのである。「いかなる宗教的生活も職業的僧侶階層の夢魔から解放されなければ、生きたものとはなりえないし、精神に対する真の支柱ともなりえないのである。」⁽²¹⁾

およそ伝統的な宗教の信者たちは、靈感を未来にではなくむしろ過去に必然的に求めるものである。もし宗教的な人生観や世界観が自由な知性をもつ界女の思想や感情を再び支配すべきであるならば、我々が宗教と結びつけて考える習慣のある多くのことが棄て去られねばならない。そのために必要な第一の最大の変革は、柔順の道徳ではなくて率先の道徳を、恐怖よりもむしろ希望の道徳を、ものごとをしないでおく道徳よりもむしろなすべきことどもを説く道徳を確立することである。神の怒りを逃れるように世間を渡ってとおることが人間の義務のすべてではない。「この世界は我々の世界であり、それを天国にするのも地獄にするのも我々にかかっている。」⁽²²⁾ 我々の求めなければならない宗教的生活は、人間の生活がどのようなものになりうるかというヴィジョンによって鼓舞され、創意と希望という広く自由な世界に住むことによって、創造の歡喜を祝福するものでもあるだろう。また我々の求めなければならない宗教的生活は、ものごとを容易に断罪するのではなく、消極的な罪のなさよりもむしろ積極的な達成に、つまりそれによって世界が若々しく美しくまた活力に満ちたものとなるような生命の歡喜や生き生きとした愛情・創造的洞察に賞賛を与えるものでもあろう。

Russell によれば、人間の活動は、大まかに言えば、三つの源泉から由来す

る。三つの源泉とは、本能と心（知能）と精神（霊性）である。

本能は、生命力の源泉であり、個人の生命と民族の生命とを統一させる紐帯であり、他の人々とのあらゆる深い一体感の基礎であり、集団的生命が個々の単位の生命を育成する手段でもある。しかし本能は、それ自体では我々自身のうちにおける、あるいは我々の物理的環境における自然の諸力を支配するにあたって、我々を無力なままに放置する。そして樹木が成長するのと同じ無思考の衝動へ我々を縛りつけたままなのである。

知能は、非個人的な思索の力によって我々を束縛から解放することができる。非個人的な思索は、本能が多かれ少なかれ盲目的に向かっていく純粹に生物学的な諸目的を我々に批判的に判断する能力を与えるのである。しかし知能は、本能に対処するにあたって、ただ単に批判的なだけであり、本能に関する限り知能の無制限の活動は破壊的となりがちであり、またシニシズムを産み出す傾向をもっている。

精神は、知能のシニシズムに対する解毒剤である。つまり精神は、本能から派生する感情を普遍化せしめ、普遍化することによってその感情を知性の批判を受けつけないものとさせる。そして思索が精神の告知を受ける場合には、思索はみずからの残酷で破壊的な性質を失い、もはや本能の死を促進せずただ本能を強要と無慈悲さから浄化し、偶然的な環境という牢獄の壁から本能を解放する助けとなるのである。

「力を与えるものは本能であり、力を望ましい目的に向かって指向させる手段を与えるものが知能であり、思索が批判によって不信化させえないような力に非個人的な用い方を示唆するものが精神である。⁽²³⁾」したがって Russell によれば、本能・知能・精神は、すべて完全な生活に絶対必要不可欠のものであって、人々が健全でありつづけねばならないとすれば、三つの宥和を達成することが大いに必要である。

思索はその本質において非個人的で超然としており、本能はその本質において個人的で個別的状況に結びついている。知能の生活は、その超然たる性格のゆえに、精神の生活によって均衡を保たれない限り人間を他の人間から内面的に引きはなす傾向をもっている。したがって、「精神なき知能は、本能を腐敗ないし麻痺させることはできるが、本能の生活にすぐれた長所をいささかも付加することはできない。」⁽²⁴⁾「必要なことは、思索と本能の両方が精神の生活によって告知されなければならない、ということだけなのである。」⁽²⁵⁾

だから例えば、Russell によれば、愛国心について、自国を排他的に愛することが非合理であることを我々に示してくれるのは知能であるが、しかしその知能は、愛国心を弱めることはできても、人類すべてに対する愛を強めることはできない。それをするのできるのは、精神だけであって、精神は、本能に生まれつきそなわった愛を拡張し普遍化することによって、それをなしとげるのである。すなわち、知能は本能を減少させうるが、普遍的目的へと転ずることはできない。それをなしうるのは精神である。本能的愛情を稀薄にさせないで、想像的作用をとおして全世界に拡大することができるもの、それが精神なのである。要するに精神は、知能と本能の間の調和を回復させるものである。そして、「宗教をつくるものは、精神の生活なのである。」⁽²⁶⁾芸術は本能から出発し、精神の領域へと上昇するが、「宗教は精神から出発し、本能の生活を支配し告知しようとしてゐる。」⁽²⁷⁾

Russell は、“Principles of Social Reconstruction” の序文において、本書における彼の目的は、「人々の人生を形づくるのに衝動の方が意識的な目的よりも影響力がある、という信念に基づいた政治哲学を提示すること」⁽²⁸⁾であると述べている。そして引きつづいて、ほとんどの衝動は、共有できないものを何か獲得ないし保持することを目ざすか、それとも私的な所有の存在しない知識・芸術・善意のような何か価値あるものを世界にもたらすことを目ざすか

B. ラッセルの宗教思想

によって、所有的衝動と創造的衝動とに区分できると論じて、「最善の人生とは創造的衝動にほとんどが基づいて築かれている生活であり、最悪の人生とは所有欲⁽²⁹⁾によってほとんどが奮起されている生活であると私は考える。」と断じているが、精神によって支配され告知された本能の生活、創造的衝動に基盤をおく生活、つまりは宗教的生活こそ、Russell にとって「社会再建の原理」に、ほかならないのである。

5. 『私の信念』

1925年小冊子として刊行された “What I Believe” の序文で Russell は、「宇宙における人間の地位と、よき人生を成就する方途におけるいろいろの可能性とについて私の考えているところを言おうとした。……人の世の出来事には、幸福に向かう力と不幸に向かう力とがあることがわかる。いずれの力が勝つかはわからないが、賢明に行動するためには両方の力を知らなければならぬ⁽³⁰⁾。」と書いている。“What I Believe” を収めた “Why I am not a Christian” を編集した Paul Edwards は、上記の Russell の言葉を紹介したあとで引き続き、「この小冊子が、1948年のニュー・ヨーク裁判訴訟手続きにおいて、Russell がシティー・カレッジで教えるのがふさわしくない証拠として提出された本の一冊であり、また本冊子からの抜粋も、Russell の見解についてまったく誤った印象を人々に与えるために出版して広く引用されたものである⁽³¹⁾。」と付記している。

まず Russell は、この『私の信念』において、人間は自然の一部分であって、自然と対照されるべきものではなく、人間の思考と身体的運動は星や原子の運動を説明するのと同じ法則にしたがっている、と説く。人間は、それ自体において何の興味もないこの物理的世界の一部なのである。精神現象も物質的

構造と結びついているのであって、キリスト教の中心的な教条である神と靈魂不滅は、科学ではまったく支持されえない。しかも、この神および靈魂不滅は、ともに仏教には見られない教説であるから、宗教にとって本質的なものとは言えないのである。

身体的生命が止まるとき精神的生命も止まると考えるのが合理的であって、心と物はある目的のためには便利な用語であるが、しかし究極的な実在ではない。ところで、恐怖は人生における他の多くのものの基礎であると同様に、宗教的教条の基礎である。個人的にしる集団的にしろ、人間についての恐怖が社会生活の多くを支配しているが、自然についての恐怖こそ宗教を生じさせるものである。しかも宗教は、恐怖に源泉があるから、ある種の恐怖に威厳をつけて人々にその恐怖を不当でないと考えさせてきたのである。

Russell によれば、そもそも自然の哲学と価値の哲学とは、まったく別のものである。両者を混同することからは害以外の何ものも生じえないのである。我々が善と考えるもの、我々が好むものは、自然哲学の問題である「現に在るもの」とは何ら関係がない。つまり自然哲学から知る限り、偉大な世界は善くもなければ悪くもなく、我々を幸福ないし不幸にするのにかかわりはないのである。

しかし価値の哲学においては、事態は逆である。自然は我々の想像しうるものの単に一部分にしかすぎない。実在上であれ想像上であれ、すべてのものは我々によって評価されることができるのであって、我々の価値判断が誤っていることを示す外部的な規準はまったく存在しないのである。我々は、みずから価値の究極的で反駁できない裁定者であって、価値の世界においては自然は単に一部分にしかすぎないのである。だから、この世界においては、我々の方が自然より大きい。価値の世界においては、自然はそれ自体では中性的で、善くもなければ悪くもないのであり、賞賛にも非難にも値いしないのである。価

B. ラッセルの宗教思想

値を創り出すのは我々であり、価値を付与するのは我々の欲望にほかならない。

このように自然の世界と価値の世界を峻別して考える Russell にとって、
「よき人生とは、愛によって鼓舞され知識によって導かれた人生である。」⁽⁸²⁾ 知識も愛もともに限りなく伸ばすことのできるものであるから、いかによき人生であろうとも、さらによりよき人生を考えることができる。愛は、いろいろな感情を包含する言葉であって、感情としての愛は黙想の純粋な喜びと純粋な慈愛の間を動揺する。最も完全な愛は、喜びと幸福の願望という二つの要素の分かたつことのできない結合である。幸福の願いのない喜びは残忍になりうるし、喜びのない幸福の願いは冷酷になりがちである。この地上のあらゆる種類のよき人生には、動物的な生命力と動物的な基盤とを考えなければならない。これがないければ、人生は味気なく興味のないものとなる。文明といえども、これの代わりになるものではなく、これに何かが付け加わったものでなければならない。禁欲的な聖人や超然とした賢者は、この点において完全な人間でありえないのである。

よき人生の要素としての知識については、Russell は、倫理的知識について考えているのではなく、科学的な知識と特定の事実についての知識について考えているのである。Russell によると、厳密に言って倫理的知識のようなものがあるとは考えられない。知識は、ある行動の目的に対する手段を示してくれるが、目的そのものや目的の正邪については何ら教えてくれないのである。すなわち、人間のあらゆる行動は、欲望から生じるものであるから、その欲望に影響を及ぼさない限りいかなる倫理的概念も何ら重要性はないのである。「人間の欲望のほかに、何ら道徳的標準は存在しない。」⁽⁸³⁾ 倫理を科学から区別するものは、何らかの特別の種類知識ではなく、単に欲望なのである。倫理的論證の有効性はすべて、その科学的な部分、すなわちある種の行為の方が広く望ま

れている目的に対する手段であるという証明にのみ存在する。したがって、Russell が「よき人生とは知識により導かれた愛から成り立つ。」と言うとき、彼を促した欲望は、このような人生をできるだけ送りたい、そして他の人々がこのような人生を送るのを見たい、という欲望なのである。したがって、このような人生が「有徳的」であり、その反対の人生が「罪深い」という意味ではないのである。このような概念は、Russell にとって何ら科学的な正当性をもっていないからである。

そもそも伝統的な宗教の欠点の一つは、Russell によれば、その個人主義であって、この欠点はまたそれと結びついた道徳にもある。この隔離した魂の個人主義は、歴史のある段階においては価値をもっていたが、現代世界においては個人的な福祉概念よりもむしろ社会的概念が必要なのである。よき人生と悪しき人生とを区別するすべてのもののうちで、独立して生きるふりをする人は、意識的ないし無意識的な食客である。正統的なキリスト教的概念において、よき人生とは有徳的な人生であり、徳は神の意志に対する服従にあって、神の意志は良心の声をとおして各個人に顕わにされるという。このような考えはすべて、外的な専制主義に服従する人々のもので、よき人生には徳のほかには知性など多くのものが含まれる。そのうえ良心というものも、青年時代の初期に聞いた教訓の漠然とした想起にすぎないから、良心は決してその所有主を育成した乳母や母親よりも賢明ではない誤りやすい導き手にほかならないのである。

最もじゅうぶんな意味におけるよき人生を送るためには、人は、よい教育・友人・愛情・子供や、欠乏と深刻な心配から守ってくれるだけのじゅうぶんな収入、すぐれた健康、興味のある仕事などをもたなければならない。すべてこれらのものは、程度は異なっても、共同社会に依存し、政治的事件により助成されたり妨害されたりする。よき人生は、よき社会において送られねばならな

B. ラッセルの宗教思想

いし、それ以外ではじゅうぶんに可能ではない。したがって、救済は、貴族主義的な理想である。それは、個人主義的であるからであって、いかに救済の観念が解釈され説明されようとも、よき人生の定義には役立ちえないのである。科学的なモラリストは、安心感を増やし、勇気を啓培することによって、恐怖と戦わねばならないのである。

以上で私は、“What I Believe”において Russell の論ずるところを概観してきたが、⁽³⁴⁾ “A Free Man’s Worship” と “The Essence of Religion” を考察し、“Religion and the Churches” を検討してきた今、彼の宗教観が奇妙にも揺れ動いて、建設的であるよりもむしろ否定的な意味において批判的になってきているのを看取しないわけにはいかないのである。この点について Ronald Jager は、次のように卓見を述べている。

「Russell がかなり若い頃には宗教や宗教と哲学との関係についてまったく異なった種類のことを言っていたことは、不思議にも忘れられた事実である。1925年以前にこの主題に関して彼が考え書いたものは、本質的な価値があるばかりでなく、他の彼の哲学にも貴重な光を投げかけるものである。忘れられたその頃の Russell と近年の神学上の論証法との断絶は、まったく突然であって不明である。この断絶は1920年代の後期に始まる。過渡期の著作は、“What I Believe” (1925) であって、これはほとんどが何を彼が信じないかについて書いた記録である。この時期に先だって Russell が宗教問題について書いたものは、すべて例外なしに、宗教的な物の見方や、それを促した衝動に対して深い共感と感情とを示していたが、この時期より後に書いたものは、少数の例外を除いて、敵愾心があるのである。この移行が極めて極端で、後年の Russell が世界の舞台においてあまりにも有名であるから、ほかの若い頃の Russell についての記憶がまったく消されてしまったのである。これは、哲学や宗教にとっての損失であり、彼の哲学を理解するためにも損失であって、償う価

値のある損失なのである。」⁽⁸⁵⁾

私は、Russell の宗教観に関する「変心」と、これに関する Ronald Jager の見解をここに一応書き留め、さらには“Why I am not a Christian”を編集した Paul Edwards が「この冊子(“What I Believe”)からの抜粋も、Russell の見解についてまったく誤った印象を人々に与えるために出版して広く引用されたものである。」という言葉を書き留めながら、引きつづいて Russell の宗教に関するその後の諸論文を眺めていくことにしよう。

6. 『なぜ私はキリスト教徒でないのか』

1927年 Battersea Town Hall で行なわれた講演である“Why I am not a Christian”は、まずキリスト教徒という言葉の意味を明確にすることから論じはじめられている。Russell によれば、キリスト教徒という言葉は、善良な人生を送ろうとしている人、あるいはみずからの内なる光にしたがって上品に生きようとしている人、というような極めてルーズな意味で今日使用されているが、しかし、みずからをキリスト教徒と呼ぶためには、唯一神と靈魂不滅に対する信念およびキリストについてのある種の信念をあわせもつことが、必要不可欠の二つの条件である。したがって、「なぜ私がキリスト教徒でないのか、その理由を語るときには、なぜ私が神と靈魂不滅を信じないのか、なぜ私はキリストがこの世で最も善良で最も賢明な人間であったとは思えないのか、という二つの異なったことを説明しなければならないのである。」⁽⁸⁶⁾

このように論じ出した Russell は、「神の存在は理性の力だけで証明できる」というカトリック教会の教条について、これを証明するために従来なされてきた議論のうちの若干を検討することからはじめるのである。

この世界に見られるものにはすべて原因があり、その因果の連鎖をさかのぼ

B. ラッセルの宗教思想

っていくと、何らかの最初の原因に必ずゆきつくが、その第一原因に神という名を与える、という「第一原因の議論」は、もしあらゆるものに原因がなければならぬとすれば、神にもまた原因がなければならぬし、またもし何らかのものが原因なしにありうるならば、その何らかのものは神であると同様に世界であってもよい。したがって、この「第一原因の議論」には妥当性はいふのである。

次に、いろいろな遊星が重力の法則にしたがい太陽の周囲を回転しているのを観測して、遊星が特有のやり方で運動しているのは、神の命令したことで、この命令のゆえにこそ遊星はあのように運動するのである、という「自然法則の議論」については、Russell によれば、自然の法則は、偶然の法則から生じる統計的な平均であって、そもそも自然法則に法則賦与者（立法者）が含まれているという考え自体が、事物の運動の記述である自然法則と、人間にある行動を命令する人間の法律とを混同することから起因しているのである。

第三に、世界中のものはすべて我々がどうにかそのなかで住むことができるように、まさにそのようにつくられているのであって、もし世界がたとえ少しでも異なっているとすれば、我々はそのなかに住むことができなかつたであろう、という「意図からの議論」がある。しかし、環境は生物に適するようにつくられたのではなく、生物が環境に適するように成長してきたのである。これが適応の基本事項であって、そこには作為的な意図の証拠はまったく存在しないのである。

それからさらに、神が存在しない限り正邪の区別はなくなるだろう、という「神の存在に対する道徳的議論」があるが、この議論は Russell によれば、正邪の区別が神の命令であるならば、神自身には正邪の区別はないことになり、したがって神は善なりと主張することは、意味のある証明ではなくなるのである。神が善なりと主張するためには、神の命令とは独立に正邪が何らかの

意味をもっていることになり、もしそうであれば、正邪の存在は、神をとおしてではなく、論理的に神に先行していることになる。

最後に、「不正義を正すための議論」であるが、この世界には正義をもたらすために神の存在が必要であり、天国と地獄の存在も必要である、という主張がある。この世界には多大の不正義を見いだすけれど、その限りでこの事実は正義が世界を支配してはいないと考えるべき理由となる。したがって、この限りでは、この事実は神を否定する道徳的議論を提供しこそすれ、神の存在を支持する議論にはならないのである。そもそも Russell によれば、人々を真に動かして神を信じさせるものは知的な議論ではない。大部分の人々が神を信じるのは、幼児期からそう信じるように教えられてきたからであり、それが主な理由であるが、さらに最も強力な理由は、安全に対する願望である。これが神に対する信仰という人々の願望に影響を与えるうえで極めて深い役割りを果たしているのである。

神の存在を理性だけで証明しようとしてきた議論を検討してきた Russell は、次に、キリストが人間のうちではたして最も善良で最も賢明な人であったかどうか、という問題に目を移して論じる。Russell は、キリストの説いたすぐれたいろいろの格言を考えてみても、自称キリスト教徒たちよりもはるかに熱意をもってキリストに賛同し、キリストにしたがってついていけると思うが、しかし、福音書に描かれたキリストに、すばらしい知恵もすばらしい善性も認められないような欠点があることを指摘し、キリストが最高度に賢明ではなかったと断じるのである。

そして Russell は、キリストの道徳的性格に見られる重大な欠点の一つとして、キリストが地獄を信じていたことをあげる。ほんとうに深く人道的な人間であれば、永遠につづく処罰といったようなことは信じられないはずである。キリストは、自分の説教に耳を傾けようとしない人々に対して、報復的な

B. ラッセルの宗教思想

怒りをくりかえしてぶちまけているが、なかでも、地獄の劫火が罪に対する処罰だという主張は、残忍きわまる教説である。それは、世界へ残忍さを注入し、いく世代にもわたる拷問を世界に与えるようになった教説にほかならない。

このようにして Russell は、「知恵の点でも徳の点でも、キリストが歴史上知られた他のある人々ほどに高い位置を占めると感じることはできない。知恵や徳の点では、仏陀やソクラテスをキリストよりも上位におくべきだと考えている。⁽⁸⁷⁾」と明言するのである。

人々が宗教を受け入れる真の理由は、さきにも少しふれたように、Russell によれば、議論とは何ら関係がない。人々は感情的な理由で宗教を受け入れるのである。宗教は人々を有徳的にするのだから、宗教を攻撃するのは極めてまちがったことだ、とよく言われるが、Russell は、そんなことに気づいてはいないと言う。キリスト教を固守しなければ、みな悪人になってしまうという考えがあるが、むしろキリスト教を固守した人々は、そのほとんどが極めて邪悪だったと思われるのである。そして、「ある時代の宗教が強烈なものであればあるほど、また教条的な信仰がいっそう根深いものであればあるほど、その時代の残忍性はいっそうひどいものであって、一般の状況はいっそう悪化したものであった。⁽⁸⁸⁾」

Russell によれば、「いわゆる信仰の時代すなわち人々がキリスト教をあらゆる完全さでほんとうに信じていた時代には、さまざまな拷問を行なった異端審問所が生まれた。また、いく百人もの不幸な婦人たちが魔女として焼かれた。そして宗教の名において、ありとあらゆる人々に、あらゆる種類の残忍な行為がなされたのである。⁽⁸⁹⁾」

人道的な感情のわずかではあってもすべての進歩は、そして刑法上のあらゆる改善、戦争を減少させる方向のあらゆる歩み、さらには有色人種の処遇改善

のためのあらゆる歩みや奴隷制度を軽減させるあらゆる方策は、つまり今まで世界に存在したあらゆる道徳的進歩は、世界の組織された教会によって絶えず反対されてきたのである。「教会に組織されたキリスト教は、世界における道徳的進歩の主たる敵であったし、今もなお敵なのである。」⁽⁴⁰⁾と Russell はまったく故意に言うのである。教会は、その主とした役割りにおいて、世界中の苦悩を漸減させるあらゆる方向における進歩と改善に対して、往時と変わらない敵対者となっている。それは、教会が人間の幸福とは無縁であるようなある種の狭量な行動の諸規則にあえて道徳というラベルをはったからにほかならない。

Russell によれば、「宗教は、第一義的にそして主として、恐怖に基づいている。」⁽⁴¹⁾そして、「恐怖は残忍性の産みの親であり、したがって、残忍性と宗教とが手に手をとってきたとしても、別に驚くにはあたらない。というのは、恐怖が残忍性と宗教という二つのものの根底にあるからである。」⁽⁴²⁾

これに反して科学は、人類がいく世代にもわたってそのなかに住んできた臆病な恐怖を克服するように我々を助けることができる。我々が空想的な支柱を求めて探してまわったり、大空に支柱としての同盟者を案出したりすることがもはやないように、科学は我々に教えることができるし、我々の心情もそのように我々に教えることができると思われるのである。

「我々は、自分自身の足で立ち、公平に正直に世界を見たい。世界の善いことも悪いことも、世界の美しいことも醜いことも、素なおに見たい。あるがままの世界を見て、その世界に恐れることがないようにしたい。世界から生じてくる恐怖にただ奴隷的に屈従するだけでなしに、知性によって世界を征服したい。神という考えはすべて、古代オリエントの専制政治から生じた概念である。これは、自由な人間にまったくふさわしくない概念である。」⁽⁴³⁾だから Russell にとって、人々が教会において自分自身を蔑視して、惨めな罪人であるな

どと言っているのを耳にすると、それは自尊心のある人間にとって軽蔑すべきふさわしくないことに思われるのである。我々は立ちあがって、この世界を率直に面と向かって見なければならぬ。そして、我々はこの世界を我々にできる最善のものにしなければならない。

「よい世界には、知識と親切と勇氣とが必要である。後悔して過去を渴望したり、はるか昔に無知な人々によって語られた言葉により自由な知性に足かせをかけたりすることは必要ではない。よい世界には、何ものをも恐れることのない物の見方・考え方と自由な知性とが必要である。死んだ過去を始終振り返って見るのではなく、未来に対する希望が必要である。死んだ過去は、我々の知性が創造することのできる未来によって、はるかに凌駕されると我々は信じるからである。」⁽⁴⁴⁾——あるいは人あって「神を恐れざる不敵な人間」と呼ばれるかも知れない Russell は、喧々たる非難の声をキリスト教徒たちにまきおこした “Why I am not a Christian” を、このように述べて終わるのである。

7. 1930年代

Paul Edwards が編集した “Why I am not a Christian” に収められている論文に、もともとは1930年に出された “Has Religion Made Useful Contributions to Civilization?” (『宗教は文明に有益な貢献をしてきたか?』) がある。

この論文で Russell は、自分の宗教観は Lucretius の宗教観であると言ひ、「宗教は恐怖から生まれた病気であり、人類にとって言うに言われない不幸の源泉である。」⁽⁴⁵⁾と考える。宗教という言葉は、現在極めてルーズな意味で非歴史的に使用されているが、「宗教は、第一義的には、一つの社会現象である。」⁽⁴⁶⁾教会は、強い個人的な確信をもった教師たちに起源を負うているかも知

れないが、しかしこれらの教師たちは、自分たちの確立した教会に対して大きな影響を減多に及ぼしてきてはいない。これに反して教会は、教会の栄えた社会に対して巨大な影響を及ぼしてきたのである。西洋文明の成員にとって最も興味のある例を考えてみると、聖書にあらわれているようなキリストの教えは、キリスト教徒の倫理とは極端にかかわりが少ないのである。「キリスト教について最も重要なことは、社会的・歴史的観点からすれば、キリストではなくて教会なのである。⁽⁴⁷⁾」そして、キリスト教を社会的な力として判断すべきであるとすれば、我々はその材料を聖書に求めてはならない。キリストの教えは、いろいろな点でカトリック教徒もプロテスタント教徒も、これに従う強い願望を示してきてはいなかったのである。

このような教会とその創設者との相違は、何ら偶然的なものではない。Russell によれば、ある1人の人の言説に絶対的な真理が含まれていると考えられるや否や、その人の言説を解釈する一団の練達の士がいて、彼らが絶対確実に権力を獲得するのである。というのは、真理にいたる鍵をにぎっているのは彼らだからである。彼らは、他の特権階級と同じように自分たちの利益のために権力を行使するが、一つの点において他のどのような特権階級よりも悪い。——というのは、一度だけまったく完全に顕わにされた不変の真理を解説するのが彼らの任務であるから、したがって彼らは、必然的にあらゆる知的・道徳的進歩の反対者となるのである。ガリレオやダーウィン、フロイトに対する反対は、その顕著な実例である。「宗教が有害なのは、単に知的にだけでなく、さらに道徳的にもである。つまり、宗教は人間の幸福に資さない倫理的規範を教える、という意味である。⁽⁴⁸⁾」

しかし Russell によれば、キリスト教の最悪の特長は、その性に対する態度である。性的な行動に関してだけでなく、性的な問題に関する知識についても、キリスト教徒の態度は人間の福祉にとって危険なのである。およそキリ

B. ラッセルの宗教思想

スト教的倫理と密接に関係する罪の概念——この人為的に植えつけられている罪の感じは、残忍さ・臆病さ・愚かさの原因の一つであり、極端に多くの害を及ぼしているものである。したがって、「宗教に対する反対には、二種類——知的および道徳的の二種類ある。知的反対は、どんな宗教も真実だと考える理由はまったく存在しないということであり、道徳的反対は、宗教的教訓は人々が現在よりももっと残忍だったときから始まり、それがなければ時代の道徳的良心が大きくなってなくなるような不人情な残酷さをも永続させるように向かっている⁽⁴⁹⁾ということである。」

そのほか Russell は、この論文において、肉体と切りはなされた魂の強調による靈魂不滅の教説により悪しき個人主義をもたらした点や、キリスト教の出現により不寛容が世界に広がってきた点などについて説いたあと、「宗教において具体化された人間の三つの衝動は、恐怖・うぬぼれ・憎悪⁽⁵⁰⁾である。」と言う。宗教は、これらの激情——人間を不幸にするこれらの激情に無制限に耽ることを許すものである。しかし、これらの激情は、教育や政治・経済の改革によって、人間本性から除去することが可能である、と Russell は主張して、この論文を次のような辛らつな言葉で結ぶのである。

「普遍的な幸福を獲得しうるための知識は存在する。この目的を実現するための主な障害は、宗教の教えである。すなわち、宗教は子供が合理的な教育を受けのを妨害する。宗教は我々が戦争の根本的原因を除去するのを妨げる。宗教は我々が古いどう猛な罪と罰の教説の代わりに、科学的な協力の倫理を教えるのを妨げる。人類が黄金時代の戸口にいることは可能なのである。しかし、もしそうならば、この戸を守る竜をまず殺害することが必要であるだろう。そして、この竜とは宗教⁽⁵¹⁾なのである。」

この論文につづいて、1930年代に書かれた著作に、“Religion and Science”（『宗教と科学』1935年）がある。

Home University Library の一冊として刊行された本書は、宗教と科学的知識との間に行なわれた戦いの原因と歴史について書かれたものであるが、Russell は、このなかで、宗教の教義が科学の理論と異なるのは、宗教が永遠で絶対に確実な真理を具現していると主張する点にあることを指摘する。「神学と科学との闘争は、権威と観察との闘争であって、」神学は古い時代のものであったから、その多くは文明時代には存続しつづけるはずがない誤謬に神聖な芳香を与えている組織化された無知にしかすぎないのである。したがって、Russell によれば、聖書にしても道徳的に価値があると考えている現代の自由主義的なキリスト教徒たちは、かつて聖書の章句を行為の指針としてそのままに受け容れたがために苦しみ死んだかず多くの無垢な人々の存在を忘れがちなのである。

Russell は、「科学の方法より以外に真理に達する方法を認めることはできない。」⁶³と言う。「しかし、感情の領域においては、宗教にまで高まる経験の価値を私は否定しない。これらの経験は、虚偽の信仰と結びつくことによって、善とともに多くの悪へ導いてきた。この虚偽の結びつきから解放されるときに、善きもののみが残るだろうということが期待されるにちがいない。」⁶⁴と、本来、感情に依拠すべき宗教が科学とは独立して異なった領域をもつことを認めるのである。

すでに私は、別の拙論においても言及したように、⁶⁵科学と倫理学の関係について Russell は、科学は価値に関し何も言うべきことがないという事実とともに、倫理学にも科学によって証明や反証のできる真理が含まれてはいないという見解を述べているが、およそ価値の問題は、Russell によれば、科学の領域外にあるというよりもむしろまったく知識の領域外にあるのである。したがって、価値に関する論争は、主張者が自分自身の感情に訴え自分自身の感情を表明し、相手にも同じような感情を喚起しようとするものにほかならない。こ

B. ラッセルの宗教思想

この点において、宗教も倫理と同様に感情に基礎をおくものであるから、両者はともに知識の領域外に属するものとして、客観的な真理にかかわるものではないことになる。

このような価値の主観性に立脚する帰結は、極めて重大であって、Russell は、この帰結から、何らか絶対的な意味での罪といわれるようなものが存在しえないこと、宇宙目的を信じる人々の間での価値論争のやり方が支持されえなくなることを指摘するのである。そして Russell は、「科学が価値の問題を決定できないことは事実であるが、それは価値の問題が知的には決して決定できず、真偽の領域外にあるからである。たとえどのような知識に到達できるにしても、達成できる知識は、科学的方法によって達成されなければならない。そして、科学が発見できないものは、人類が知りえないものである。」⁶⁹と結論するのである。

かくてこの『宗教と科学』の終章で Russell は、コペルニクス以後の時代において、科学と神学が意見を異にしたときに勝利を示したのは常に科学であったと言う。魔法と医術におけるように実際の結果が問題になるところでは、神学が人間の生来の野蛮さを助長したのに対し、科学は被害を減少させるのに役立ってきた。従来、科学的見地の普及は、神学的見地とは反対に人類の幸福を明らかに助長してきたのである。しかし、と Russell は言う。科学的技術が科学的精神より成果においていっそう重要になりつつある現在、そしてまた、新しい形態の宗教（共産主義）がキリスト教の位置に代わってキリスト教の後悔している誤謬を繰り返しつつある現在、事態は新しい局面に入っているのである。「科学的精神は、慎重で仮説的で漸進的である。科学的精神は、すべての真理を知っているとは考えず、どの理論にも修正が必要であり、修正のための探求の自由や論議の自由が必要であることを知っている。しかし、科学的技術は理論的な科学から発展し、しかもその科学的技術は科学的理論のも

っている仮定性をまったくもっていないのである。」⁵⁷⁾——このように、知的自由に基づく科学的精神の重要性を力説して、Russell はこの著作を結ぶのである。

“Religion and Science” につづいて、1936年 “The Mysteries of Life and Death” という書名の本に、“Do We Survive Death?” (『我々は死後も生き残るか?』) なる短い論文を書いているが、この論文で Russell は、人間が肉体的に死んだ後に精神が生き残ることがありそうにもないことを論じている。

Russell によれば、人間の身体の連続性は、現象と行動の事柄であって、実体の事柄ではない。また1人の人間の精神的連続性は、習慣と記憶の連続性であって、記憶と習慣は、ちょうど川が川床と結びついているのと大体同じような仕方で、脳の構造と結びついているのである。脳は、一つの構造として、死において分解され、したがって記憶も分解される。このような事実から考えてみると、「精神が死において生じる脳の構造の全面的破壊のあとに生き残るとい⁵⁸⁾うことは、ほとんどありそうにもないように思われるのである。」

したがって、「来世に対する信仰をひきおこすのは、合理的な論証ではなく⁵⁹⁾て、さまざまな感情なのである。」これらの感情のなかで最も重要なものは、本能的な生物学的に有用である死の恐怖であるが、さらにもう一つ、人間の卓越性についての賞賛の念がある。しかし、Russell によれば、そもそも自然は我々の価値には無関係であって、善悪の概念を無視することによってのみ、我々は自然を理解できるのである。善悪の問題についての我々の感情や信仰は、我々にまつわる他のすべてのものと同様に、生存競争においてくりひろげられたおのずからなる事実であるから、何ら神的なあるいは超自然的な起源があるのではない。「我々が生きている世界は、混乱と偶然の結果として理解することができる。しかし、もしそれが自由意思的な目的の結果であるならば、その

B. ラッセルの宗教思想

目的は悪魔の目的だったにちがいない。私としては、偶然の方がはるかに苦しくないし、はるかにもっともらしい仮説だと思っている。⁽⁶⁰⁾」

靈魂不滅を否定する Russell は、来世に対する信仰を要請する人間の感情が、極めて人間的なものであって、超自然的なものではないと説くことによって、自然を超えた何か神秘的な世界の存在を想像する愚をいましめるのである。

8. 1950年代

“Religion and Morals” (『宗教と道徳』) という1952年に Russell が書いて、“Why I am not a Christian” に収められている極めて短い小論文がある。

この論文で Russell は、神に対する信仰がなければ人は幸福にも有徳的にもなりえない、という人々が多いけれど、観察と経験によってそうとは考えられないと言う。不幸を信仰の欠如のせいにした方が、人は誇りやすいからであろうし、道徳についてはこの言葉をどのように理解するかによって大いに異なってくるが、Russell としては、重要な徳は親切と知性だと考える。「知性は、たとえどのような信条であっても、信条によって妨げられる。そして親切は、罪と罰に対する信仰によって抑制されるのである。⁽⁶¹⁾」だから、「世界が必要とするものは教条ではなく、スターリンによるかあるいは信仰者と見せかけで想像された神によるか、そのいずれによって加えられるにせよ、何百万人も⁽⁶²⁾の拷問は望ましくないという信念と結びついた科学的探求の態度である。」と主張するのである。

つづいて1953年、“Human Society in Ethics and Politics” (本書の出版は1954年) に一章として収められている “Will Religious Faith Cure Our

Troubles?”（『宗教的信仰は我々の不幸をいやすか？』）を Russell は書いている。

国家間の葛藤の原因は、Russell によれば、古来からの権力政治の衝突である。それは、根本的には信仰と無信仰の衝突、あるいはある信仰と他の信仰の衝突ではなく、世界の覇権の機会をそれぞれがうかがう二つの強力な帝国間の衝突なのである。

ところでキリスト教徒たちは、自分たちの信仰は有益で他の信仰は有害である、と考えているが、Russell に言わしむれば、「私の主張したいことは、信仰はすべて有害であるということである。信仰とは、証拠の何らないものに対する確固とした信念であると定義できるだろう。証拠のある場合には、人は誰も信仰のことは語らない。……我々はただ証拠の代わりに感情をおくことを望むときにだけ信仰について語るのである。証拠の代わりに感情をおくことは、集団が異なれば異なった感情を代置するから、闘争になりがちである。……合理的に擁護できないものを何か人々が信ずることを極めて重要だと考えるならば、その何かが何であっても相違はまったくない。」⁽⁶³⁾

信条を戦争において効果的にするものは、信条の否定的な面、すなわちその信条を採り入れない人々をその信条が憎悪するということである。したがって信仰と称されるものに対する反対の多くは、問題の信仰が何であるかにはまったく依存しない。「重要なことは、何を信じるかではなく、いかにそれを信じるか⁽⁶⁴⁾ということである。」人は自分の信念が理性に基づいていると考えるならば、その信念を迫害よりもむしろ論証によって支持し、その論証が自分に反すれば信念を棄てるはずである。しかし、自分の信念が信仰に基づいておれば、論証は無用であることを知り、したがって迫害の形でか、それとも教育と称されるもので若者の心の発達を阻止ないし歪曲するかいずれかによって、力に訴えることになるのである。

このように述べた Russell は、“Religion and Morals”の最後に書いた一節、すなわち「世界が必要とするものは教条ではなく、……何百万人もの拷問は望ましくないという信念と結びついた科学的探求の態度である。」というまったく同じ言葉をもって、この論文を終えるのである。⁶⁵⁾

これと同じ1953年に書いた論文に、“What is an Agnostic?” (『不可知論者とは何か?』)がある。

「不可知論者は、キリスト教やその他の宗教が関心をいだく神や来世のような事柄に真実性があるかどうかを知ることは不可能であると考え。あるいは、たとえ不可能でないとしても、少なくとも現在においては不可能であると⁶⁶⁾考える。」

冒頭にこのように述べた Russell は、引きつづいて20項目にわたり不可知論者の具体的なあり方を論じているが、これを彼の掲げた項目の順序にしたがって要約してみよう。

(1) 不可知論者は無神論者であるのか? 否。無神論者は、キリスト教徒のように、神が存在するか否かを我々は知ることができると考える。ただキリスト教徒は、神が存在することを我々は知ることができると考えるのに対して、無神論者は、神が存在しないことを我々は知ることができると考えるのである。不可知論者は、肯定・否定いずれの根拠もじゅうぶんには存在しないと言って、判断を保留する。と同時に不可知論者は、神の存在は不可能ではないが、極めてありそうもないと考え、ありそうもないから実際問題として考慮するに値いしないときえ考えるのである。したがってこの場合には、不可知論者は、無神論とはあまりはなれてはいないのであって、理論的には別として実際上は無神論者と一致しているのである。

(2) 「神の律法」を否定するからには、行為の指針としてどのような権威を容認するのか? 不可知論者は、宗教的な人々が容認するような意味におけ

る「権威」ならどのような権威でも容認しないのである。人は行為の問題を自分自身で考えぬかなければならないと考えるのである。

(3) 何が善で何が悪であるかをどのようにして知るのか？ 罪というものを不可知論者はどのように考えるのか？ 不可知論者は、善・悪に関してキリスト教徒のように確信していない。罪という概念も有用ではなく、望ましくない行為に対する抑止的ないし矯正的な刑罰はともかく、人々に地獄を認めさせる報復的な刑罰としての罪責意識は無用である。

(4) 自分の気に入ったことなら何でも不可知論者はするのか？ ある意味では否。しかし別の意味では、人は誰でも自分の気に入ったことなら何でもするが、刑罰の恐怖、悪事が発見されるのを恐れる不快の念、いわゆる良心の存在などにより、他の人と同様に不可知論者も行為を慎むのである。

(5) 不可知論者は聖書をどのように考えるのか？ 啓発された牧師と同様に、聖書を神が靈感を与えて書かれた書だとは考えないし、聖書の初期の歴史をホメロスの伝説以上に正確に真実だとも考えない。聖書の道徳的教訓は、善と考えられるときもあれば、極めて悪と考えられるときもある。

(6) 不可知論者はイエス・キリスト、処女受胎、聖三位一体をどのように考えるのか？ 不可知論者は、神を信じないから、イエスが神であったとは考えることができないし、聖書で語られているようなイエスの生涯と道徳的教訓を称賛はするけれど、仏陀、ソクラテス、リンカーンと同格におく不可知論者もいるだろう。処女受胎も異教の神話から引き取られた教理であって、別に異例だとは考えない。処女受胎にしても聖三位一体にしても、神に対する信仰がなければ不可能なのである。

(7) 不可知論者はキリスト教徒であることができるか？ キリストの時代以来、神と靈魂不滅を信じキリストを神であると考えた人をキリスト教徒と称してきたが、キリスト教徒という言葉は、時代が異なるにつれて異なった意味

B. ラッセルの宗教思想

をいろいろともってきた。もしキリスト教徒によって、隣人を愛し受難に偏見のない共感同情の念をい দিয়ে, 現在の世界を傷つけている残忍さやいまわしい行為から解放された世界を熱烈に願望する人のことを意味するならば、私をキリスト教徒と呼んでも正当とされるだろう。しかし、歴史の示す限り、このような定義は容認できないのである。したがって、神と靈魂不滅に対する信仰を絶対必要不可欠とするキリスト教徒には、不可知論者は、言葉の本来的な意味において、なりえないのである。

(8) 不可知論者は人間に靈魂があることを否定するのか？ 人の一生を通じ、さらには来世にさえ永続する何か非物質的なものを靈魂によって意味するとすれば、このような靈魂が人間に存在することを不可知論者は信じないのである。もっともこのことは、不可知論者が唯物論者でなければならぬことを意味するのではなくて、精神も物質ともに論議上の単なる便宜的なシンボルにすぎないものであって、現実存在する実体であるとは考えていないのである。

(9) 不可知論者は来世・天国ないし地獄を信じるのか？ 人々が死後生き残るかという問題は、証拠の可能な問題であって、靈魂研究や降神術は、このような証拠を与えるものであると多くの人々によって考えられているが、不可知論者は証拠があると考えなければ、死後生存の見解はとらない。天国と地獄は異なった問題であって、地獄に対する信念は、罪の報復的刑罰はよいものであるという信念と結びついているが、不可知論者はほとんどこれを信じない。天国については、降神術による天国の存在の証拠がいつの日か多分あるかも知れないが、しかしほとんどの不可知論者は、このような証拠があるとは考えないから、したがって天国を信じないのである。

(10) 神を否定して神の審判(天罰)を恐れないのか？ ほとんどのものは、きっと恐れていないし、人類の大部分は神を信じないが、その結果として目に

見える罰を受けていないことに私は気がついている。そして、もし神が存在すれば、神は神の存在を疑う人々によって感情をそこなわされるほど不安な虚栄心をもっているなどということは極めてありそうもないと私は考えるのである。

(11) 不可知論者は自然の美や調和をどのように説明するのか？　美と調和がどこに見いだされるのかわからないが、動物界をとおして動物たちは無慈悲にもおたがいを食い物にしあっているのであって、たいていの動物は、他の動物によって残酷にも殺されるか、飢餓のため徐々に死ぬか、そのいずれかである。私としては、さだなむしに極めて大きな美や調和を見ることはできない。さだなむしは人間のうちよりも動物の間にいっそう多く流行しているから、この被造物を人間の罪に対する罰として考えることもできないのである。自然によって星を散りばめた天の美のようなもののことを考えるにしても、その星は爆発してその隣りにいる万物を霧消させてしまうのである。美は主観的なものであって、見る人の目のなかにしか存在しないものである。

(12) 不可知論者は、奇蹟やそのほか神の全知全能の啓示をどのように説明するのか？　不可知論者は、自然の法則に対立する出来事という意味における奇蹟の証拠が存在する、とは考えない。いろいろと行なわれている奇蹟の記録については、不可知論者は、それらを伝説として片づけ、このような伝説はすべての宗教にも多くあるという事実を指摘する。

(13) 宗教が反対する卑しい残酷な激情が存在してきた。もし宗教的原理を棄てるならば、人類は存在しうるだろうか？　卑しい残酷な激情の存在は否定できないが、しかし宗教がこれらの激情に反対してきたという証拠は歴史に見いだせないのである。むしろ逆に宗教は、これらの激情を正当化してきて、人々が後悔の念なしに激情に耽るのを可能にしてきたのである。残酷な迫害は、他のいづこよりもキリスト教国における方がいっそう当たりまえであった。追

B. ラッセルの宗教思想

害を正当化するように思われるものは、教条的信念である。温情と寛容は、教条的信念が衰退するのに比例して優勢になるだけである。今日では新しい教条的宗教、すなわち共産主義が発生してきた。他の教条の体系と同じように、共産主義に対しても不可知論者は反対する。現在の共産主義の迫害的性格は、初期のキリスト教のとまったく同じである。キリスト教が迫害的でなくなったとすれば、それは教条主義者をいささかなりとも教条的でなくさせてきた自由思想家の働きによると言えよう。現代のキリスト教徒が本質的にキリスト教的であるとする寛容の精神は、実際は、疑問を許容し絶対的な確実性を疑う気質の所産なのである。

(14) 不可知論者にとって人生の意味は何か？ 「人生の意味」の意味は何であるのか、という別の問題によって答えたいような気持ちになる。多分、一般的な目的のことなのであろう。人生（生命）一般に何か目的があるとは考えられない。生命は、まさに生起しただけなのである。しかし、一人一人の間には目的があって、この目的を人々に棄てさせるようにするものは、不可知論者に何もないのである。

(15) 宗教の否定は結婚や純潔の否定を意味しないのか？ 結婚や純潔はこの地上に不幸をひきおこすが天国にいたる手段として激励しなければならない、という見解をとる人は、不可知論が彼の徳と称するものの衰退にいたることを予期するだろうが、彼の徳と称するものが地上にいる間の人類の幸福に仕えるものでないことを認めねばならないことになるだろう。またもし、結婚や純潔はこの地上の世俗的な幸福に寄与する、と信じる人は、この論証が不可知論者の心に対しても訴えるようなものであると考えねばならない。不可知論者は、何も性道徳について特異な見解をもっているわけではなく、性的欲望の抑制のない耽溺に反対する妥当な論証があることを認めるのである。しかし、この論証を想定された神の命令からではなく、地上的な源泉から引き出すのであ

る。

(16) 理性だけに対する信仰は、危険な信条ではないのか？ 理性は精神的および道徳的な法がなければ不完全で不適当ではないのか？ いかにも不可知論的であっても、分別のある人ならば、理性だけに対する信仰をもっている人はいない。理性は、事実の事柄にかかわるものであるが、事実の事柄だけではどんな目的を我々が追求すべきかは我々に教えてくれないから、行為を決定するのにじゅうぶんではない。目的の領域においては、理性より何かほかのものが必要であり、それは感情と情緒と欲求の領域なのである。

(17) あらゆる宗教を迷信ないし教条の形式と考えるのか？ 現存宗教のうちでいずれを最も尊敬するのか、そしてそれは何故か？ 多くの人々を支配してきた大きく組織化された宗教は、すべて多少なりとも教条を含んでいるが、宗教という言葉は、その意味がそれほど明確ではない。たとえば、儒教は教条をまったく含んでいないが、宗教と呼べるだろう。そして、自由主義的なキリスト教のある形では、教条の要素を最少限に減少されているのである。歴史上の大宗教のうちで、私は仏教、殊に最も初期の形式での仏教が好きである。それは、迫害の要素が最少にしかなかったからである。

(18) 共産主義も不可知論と同じように宗教に反対する。不可知論者は共産主義者であるのか？ 共産主義は、宗教に反対しているのではなく、ちょうど回教と同じようにキリスト教に反対するだけである。共産主義は、少なくともソビエト政府と共産党によって主張される形式においては、特に極めて有毒で迫害的な種類の新しい教条の体系である。したがって、純粋な不可知論者はすべて共産主義に反対しなければならないのである。

(19) 科学と宗教は調和するのが不可能である、と不可知論者は考えるか？ その答えは、宗教の意味によって決まる。宗教が単に倫理の体系を意味するならば、宗教は科学と調和することができる。またもし疑うことのできない真実

B. ラッセルの宗教思想

と考えられた教条の体系を意味するならば、科学的精神とは両立できないのである。科学的精神は、証拠なしに事実の事柄を受け容れることを拒否し、さらにまた完全な確実性はほとんど達成できないと考えるからである。

20 神が存在するということをどのような種類の証拠があれば確信できるか？ 大いにありそうにもないように思われる出来事を含めて、これからの24時間の間に私に起ころうとしているすべてのことを予言する空からの声を私が耳にし、しかも事実それらの出来事がすべてそのときに続いて起こったならば、おそらく私は、少なくとも何かある超人間的な知性の存在を確信するかも知れないと思う。ほかに私を確信させうるような同種の証拠を想像することはできるが、しかし私の知る限り、そんな証拠は存在しないのである。

“Will Religious Faith Cure Our Troubles?” および “What is an Agnostic?” を書いた翌年の1954年、Russell は、前者によく似た題名の “Can Religion Cure Our Troubles” (『宗教は我々の不幸をいやすことができるか?』) を書いている。この論文は短いものであるが、Russell が宗教に関して特に書いたものでは最後の論文のように思われる。

人類は、現在、致命的な危険な状態にあつて、恐怖のため人々は過去と同じように神に避難所を求めようとしており、宗教の極めて一般的な復活が西洋中でみられる。「ナチスや共産主義者がキリスト教を放逐したが、キリスト教の放棄こそ少なくともいくらかは我々の不幸の原因である。したがって、世界がキリスト教に復帰すれば国際問題も解決されるだろう。」——こんな考えは、Russell によれば、恐怖から生まれたまったくの妄想である。こんな考えにとりつかねなければ豊かな思考のできる人々を誤って導き、妥当な解決を妨げるようになる危険な妄想なのである。

いったい道徳は、Russell によれば、宗教的な人々が信じているほど宗教に対して依存しているものではない。むしろ、宗教的な教条を受け容れる人々よ

りも拒否する人々の間のほうに極めて重要な徳が見いだされることさえあるのである。特にこのことは、誠実さないし知的高潔さの徳に当てはまる。「知的高潔さというのは、大いに論議される問題を証拠にしたがって決定する習慣、あるいは証拠が結論的でない場合にはその問題を未決定のままにおいておく習慣⁽⁶⁷⁾のことである。」

道徳的諸規則には、大まかにいって二種類ある。すなわち、宗教的な信条にしか基礎のないものと、あきらかに社会的な有用性に基礎のあるものと二種類ある。神学的基礎をもつ道徳の体系は、権力の所有者が権威を保持し、青年の知的精力を損ねる道具の一つとなるのである。「宗教は真実であるから信ずべきものだ」と論じる人々は、尊敬はできるけれども、宗教は有用であるから信ずべきもので、宗教が真実かどうかを問うことは時間の浪費であると言う人々に對しては、深い道徳的な非難しか感ずることができない。」⁽⁶⁸⁾と Russell は言う。

キリスト教の弁証者の間では、共產主義をキリスト教とは極めて異なったものと考えて、共產主義の害悪をキリスト教諸国で享有されるように考えられる福祉と対照させるのが極めて一般であるが、Russell は、共產主義の害悪は信仰時代のキリスト教に存在した害悪と同一であるから、まったくの虚偽であると主張する。

キリスト教は、その極端な迫害的な性格の点で、ほかの宗教とは区別されてきた。仏教は、決してキリスト教のように迫害的な宗教ではなかったのである。キリスト教が道徳に進歩をもたらすという考えは、歴史的な証拠を無視するか偽わるかによってしか主張できないことなのである。そして、このようなキリスト教の中世的教会を髣髴させるものが、共產主義にほかならない。「世界が必要とするものは、合理性と寛容と人間家族の各部分の相互依存性の認識⁽⁶⁹⁾とである。」そして Russell は、我々の不幸をひきおこしたのは、知性では

なく、したがって不幸を救うものは非知性ではなくて、もっと多くのもっと賢明な知性だけがいっそう幸福な世界をつくることができると論じるのである。

9. まとめとして

以上において私は、1903年の“A Free Man’s Worship”から1954年の“Can Religion Cure Our Troubles?”にいたるまで、Russell が特に宗教に関して書いてきた論文や書物を執筆の年代順に考察してきた。そして、そこには、一貫して脈々と流れる太い血管のような彼の基本的な思考形式というか信念のようなものが明らかに見られるとともに、他方では、「哲学的な学説の体系が変化しないことは、知的な沈滞の証拠である。」⁽⁷⁰⁾とさえ言う彼の知的誠実さに基づく宗教観の揺らめきのようなものが察知できるのである。

ここで、Russell の宗教思想について総括的にいささか私見を述べてみることにしよう。

1951年12月16日の“The New York Times Magazine”に掲載された“The Best Answer to Fanaticism—Liberalism”（『狂言に対する最良の解答——自由主義』）の末尾に Russell は、「おそらく自由主義的な物の見方・考え方の本質は、一つの新しい十誡に要約することができるだろう——それは、古い十誡に取って代わろうとするものではなく、ただ単に古い十誡を補足するためにすぎないが。」⁽⁷²⁾と前置きして、一人の教師として Russell が広めたい十誡を書きしるしているが、その第一条は、「何ごとも絶対的に確実だと決して思ふなかれ。」⁽⁷³⁾という懷疑精神の堅持と高揚である。「確実性の探求」は、「幸福な世界の創造」とともに、少年時代以来の Russell が献身的に情熱をかたむけて解決を求めてきた課題であって、ユークリッド幾何学の公理や地球の球形を盲目的に容易に首肯できなかった少年 Russell は、「証拠の存在し

ないものに対する信念」としての信仰を容認できない成人となる。

あるとき Russell は、公開の会合の席上で、死後たまたま創造主に出くわしたらどう言うかと尋ねられ、「神よ、なぜご自分の存在の証拠をこんな不じゅうぶんになさったのですか、と言う。」と、ためらわずに答えたという——A. J. Ayer は、この話は、キリスト教神学の神の存在に関する問題に対して Russell がとる態度を極めてうまく言いあらわしていると述べているが、⁽⁷⁴⁾ 観察および実験という経験に基づく証拠がなければ、いかなる事実の事柄をも受け入れない科学的精神の権化 Russell は、Alan Wood のいわゆる「情熱的な懐疑主義者」として、神や来世の存在の真実性を知りえないとする不可知論者なのである。そして、このことは、彼自身も認めているように、理論的にはともかく実際問題として無神論者といってもさしつかえないだろう。

しかし、だからといって Russell は、はたして宗教そのものをまったく否定しているのであろうか。初期の論文はしばらくおいても、1935年の“Religion and Science”のなかで、「感情の領域においては、宗教にまで高まる経験の価値を私は否定しない。」と言う Russell は、ただそれが虚偽の信仰と結びつき悪へ導かれることを免れて、善きものだけが残されることを期待すると論じている。Russell において宗教は、本来、倫理と同じように、事実認識にかかわる科学の領域とは異なった独立した領域、すなわち感情に基礎をおく価値の世界に属するものなのである。したがって、それは、真偽の領域外にあるものとして客観的な真理にかかわるものではないけれども、人間の感情に依拠し感情を表明し感情を伝達することによって他の人間にも同じような感情を触発喚起しようとする価値の問題として、科学的に到達できる知識ではないが、否定することのできない事実なのである。

ただ Russell は、Edgar Sheffield Brightman が“Russell's Philosophy of Religion”で指摘しているように、⁽⁷⁵⁾ キリスト教の何たるかの説明を提

B. ラッセルの宗教思想

示するよりもキリスト教に対する Russell の嫌悪感を表明すること、つまり定義よりも拒否にいつそうかわってきたのである。「Russell は明らかに、非キリスト教的宗教や普遍的宗教の本質——宗教をして宗教たらしめる観念には、少しも研究を向けてはいないのである。」⁽⁷⁶⁾ Russell の批判的な宗教哲学は、建設的よりは否定的な意味において批判的であり、主として歴史的キリスト教に対して浴びせかけた非難攻撃の考察から成り立っている。だから彼は、一方では、価値について有効に知る方法が存在しないと主張しながら、他方では、彼自身の想定した妥当性や価値意識に基づいてキリスト教を批判しているのである。つまり、宗教の世界を認め知りながら、組織されたキリスト教の教団としての教会を拒否するに急で、宗教そのものの本質を究明する余地がほとんど残されていなかったと見なさざるをえないのである。それほど Russell は、「幸福な世界の創造」にとって、キリスト教（教会）がもたらしてきている害悪は大きくて深いと考えたのであろう。

ところで、すでに Ronald Jager の卓見として言及したように、比較的若い頃の Russell とその後の Russell とでは、宗教観にかなり大幅な相違が看取される。端的な例をあげれば、崇拜・黙従・愛を宗教の必要不可欠な三要素として統一体における無限の人生のための絶対的な自我放棄を考えていた若い頃の Russell は、1925年の“*What I Believe*”を執筆した頃を境として、恐怖・うぬぼれ・憎悪の三位一体を宗教の核として考えはじめ、宗教（というよりも宗教組織としての教会）の反人道的な不寛容と教条的信仰のもつ道徳的保守性をひたすら非難攻撃するようになったのである。いったい、この Russell における移り行きは、どこにその原因があるのだろうか。「忘れられた若い頃の Russell と近年の論争（的な Russell）との断絶は、まったく突然であって不明である。」と Ronald Jager は述べているが、しかし、原因のない変心はないであろう。私として考えられることは、拙論『B. ラッセルの倫理思想』

4において Russell の倫理的関心の変化に関しても述べたように、⁽⁷⁷⁾ 何と云っても第一次世界大戦の体験が、彼に決定的な影響を与えたと思うのである。

Russell 自身、“Portraits from Memory and other Essays” (1956) のなかで、「私の人生は、第一次世界大戦の勃発の前と後という二つの時期にはっきりと分かれてきた。この大戦は、私から多くの偏見を振り落とし、新たに多くの基本的な諸問題について私に考えなおさせた。」⁽⁷⁸⁾と、同じことを違った個所で二度までも述べ、さらにまた、その『自叙伝』では、「1910年と1914年にいたる時期は、過渡期であった。1910年より以前の私の人生と1914年より以後の私の人生は、ちょうどファウストがメフィストフェレスに出会う前の人生と出会った後の人生のように、はっきり別々のものであった。」⁽⁷⁹⁾と書いているのである。第一次世界大戦が Russell の宗教観をも変えたことは、この言葉からすれば、むしろ当然と言わなければならない。第一次世界大戦は、Russell にとって強烈な体験だったのである。それまで宗教の本質についてペンを振ってきていた彼は、1916年の“Religion and the Churches”を機に、宗教の本質や理念よりも、現実の宗教組織とその活動に——人類の最大の不幸であり害悪である戦争に反対もできない教会に対して、批判的な論陣をはり、闘争的になり非難攻撃をかけたのであろう。

そもそも Russell は、反ないし非宗教的であるのだろうか。人々を動かして神を信じさせるものは、知的な議論ではなく、幼児期からの教育であり、安全に対する願望である、とは Russell みずから“Why I am not a Christian”で述べている言葉であるが、“My Religious Reminiscence”（『私の宗教的回想』1938）や“My Mental Development”（『私の精神的発達』1951）で示されているように、Russell の家庭における幼児期からの宗教教育は、あまり徹底的ではなかったようだし、安全に対する願望も彼の著しい性格特徴でなかったことは確かのようなのである。その意味においては、Russell を宗教的、少なく

ともキリスト教的とは決して言うことができないだろう。

しかし、すでに述べたように、ごく初期の“A Free Man's Worship”の荘重な文体で語られている自然科学的宇宙観の立場に立つ有限相対の人間観や、“The Essence of Religion”でみられる自我放棄と無執着へのすすめ、さらにまた1935年の“Sceptical Essays”（『懐疑論集』）にある「ありのままの世界における自分の地位を見ようとししない人間は、恐怖から解放されない。自分の卑小さを見られない間は、成就しうる偉大さを誰人も達成することはできない。」という宇宙塵（＝宇宙人）的存在性の自覚、あるいはまた、「個人的人間存在は、河のようなものであろう——最初は小さく狭い土手の間を流れ、激しい勢で丸石をよぎり滝を越えてすすむ、次第に河幅は広がり土手は後退して水はもっと静かに流れ、ついにはいつのまにか海へ没入して苦痛もなくその個⁽⁸⁰⁾的存在を失う。」という“Portraits from Memory and other Essays”（1956年）における宇宙の生命に没入して死の恐怖を征服する覚悟と諦念など——これらの片言隻語からみても、あるいはまた、A. J. Ayerの言うような「人間の福祉に対する Russell の関心は、もし人々がこの世で幸福になりえないのなら、どこか他の世で幸福になる機会はないだろう、という信念によって強められたのであ⁽⁸²⁾った。」という推断——Russell の徹底的な人間の此岸の有限性の自覚——からみても、Russell は現世を「幸福な世界の創造」のために精一杯生きた、言葉の最もすぐれた意義において、宗教的な人と言えるのではないだろうか。

しかし、E. S. Brightman も述べているように、「不幸にして Russell の宗教に対する否定的な面への没頭が、宗教の積極的な面の可能性と経験的証⁽⁸³⁾に正当な注意を与えることを妨げてきた」のであろう。「確実性の探求」とそのための「知的高潔さ」が、Brightman のいわゆる「適切さの探求」を背景に押しやっていたなければ、Russell の燦然と輝く心が彼自身の宗教についての

経験的な哲学へと積極的に向けられ、その成果は啓蒙的に人の世にいつそう多くの光明を投じたことであろう。だが、宗教を説くよりも宗教的な生き方そのものを如実に世界中の人々に示した哲人——それが Russell の真骨頂ではなかろうか。

＜注＞

- (1) Bertrand Russell : Why I am not a Christian and other essays on religion and related subjects (1957) p.9
- (2) Ronald Jager : The Development of Bertrand Russell's Philosophy (1972) p. 486
- (3) Barry Feinberg and Ronald Kasrils (ed.) : Dear Bertrand Russell...—— A selection of his correspondence with the general public 1950~1968. (1969) P.41
- (4) Ronald Jager : op.cit., p. 484
- (5) Robert E. Egner and Lester E. Denonn (ed.) : The Basic Writings of Bertrand Russell (1962) p. 62
- (6) Bertrand Russell : Mysticism and Logic, Chapter III A Free Man's Worship (1917) p.41
- (7), (8) Ibid., p.41
- (9) Ibid., p.45
- (10) Ibid., p.46
- (11) Alan Wood : Bertrand Russell——the Passionate Sceptic (1957) p.66.
- (12) Ronald Jager : op. cit., p.484
- (13) Ibid., p.492
- (14) R. E. Egner and L. E. Denonn (ed.) : op. cit., p.565
- (15) Ibid., p.567
- (16) Ibid., p.573
- (17) Ibid., p.574
- (18), (19) Ibid., p.575
- (20) Ibid., p.576
- (21) Bertrand Russell : Principles of Social Reconstruction (1916) p.140
- (22) Ibid., p.141
- (23) Ibid., p.145
- (24) Ibid., p.149

B. ラッセルの宗教思想

- ②5 Ibid., pp.149~150
- ②6 Ibid., p.142
- ②7 Ibid., p.143
- ②8, ②9 Ibid., p.6
- ③0 Bertrand Russell : Why I am not a Christian (1957) p.45
- ③1 Ibid., p.45
- ③2 Ibid., p.51
- ③3 Ibid., p.54
- ③4 “What I Believe” については、特に倫理的視点から『B・ラッセルの倫理思想』(仏教大学人文学論集第6号)において私見を述べている。
- ③5 Ronald Jager : op, cit., p.485
- ③6 Bertrand Russell : Why I am not a Christian (1957) p.13
- ③7 Ibid., p.24
- ③8, ③9, ④0 Ibid., p.25
- ④1, ④2, ④3 Ibid., p.26
- ④4 Ibid., p.27
- ④5, ④6, ④7 Ibid., p.28
- ④8 Ibid., p.29
- ④9 Ibid., p.32
- ⑤0 Ibid., p.42
- ⑤1 Ibid., p.44
- ⑤2 Bertrand Russell : Religion and Science (1935) p.16 (引用は、Oxford University Press paperback, 1970年版による。)
- ⑤3, ⑤4 Ibid., p.189
- ⑤5 『B・ラッセルの倫理思想』(仏教大学人文学論集第6号p.29)
- ⑤6 Bertrand Russell : Religion and Science, p.243
- ⑤7 Ibid., p.245
- ⑤8 Bertrand Russell : Do We Survive Death ? p.74 (引用は “Why I am not a Christian” 所収による。)
- ⑤9 Ibid., p.74
- ⑥0 Ibid., p.76
- ⑥1 Ibid., p.168
- ⑥2 Ibid., p.169
- ⑥3 Bertrand Russell : Human Society in Ethics and Politics (1954) pp. 215~216

- 64 Ibid., p.220
- 65 Ibid., p.221
- 66 R. E. Egner and L. E. Denonn (ed.) : op. cit., p.577 fol.
- 67 Bertrand Russell : Why I am not a Christian, p.160
- 68 Ibid., p.163
- 69 Ibid., p.167
- 70 R. E. Egner and L. E. Denonn (ed.) op. cit., p.7
- 71 R. E. Egner and L. E. Denonn (ed.) op. cit., pp.31~36
- 72 The Autobiography of Bertrand Russell, Volume III (1944~1967) pp. 60~61 および Barry Feinberg : The Collected Stories of Bertrand Russell (1972) p.333
- 73 Bertrand Russell : Portraits from Memory and other Essays (1956) p.53
- 74 A. J. Ayer : Bertrand Russell (1972) pp.130~131
- 75 Paul Arthur Schilpp (ed.) : The Philosophy of Bertrand Russell (1971) p.543
- 76 Ibid., p.542
- 77 前掲, p.24
- 78 Bertrand Russell : op. cit., p.30 および p.35
- 79 Bertrand Russell : op. cit., Volume II (1914~1944) p.15
- 80 Bertrand Russell : Sceptical Essays (1935) p.34
- 81 Bertrand Russell : op. cit., p.52
- 82 A. J. Ayer : op. cit., p.138
- 83 Paul Arthur Schilpp (ed.) : op. cit., p.556

——Dec. 19, 1973脱稿——